

●書下し歴史小説

紀伊國屋文左衛門

羽生道英

Habu Michihide



●書下し歴史小説

紀伊国屋文左衛門

著者／羽生道英（はぶ みちひで）

1935年大阪府生まれ。近畿大学法学部卒。防衛庁事務官を経て、びわ湖放送に勤務。滋賀県芸術祭小説特選入賞（2回）。滋賀県文芸出版賞受賞。滋賀文学会理事。時代・歴史小説および評伝の分野で精力的な執筆を展開。主な著作は『商人道おもしろ史話』（毎日新聞社）など。



紀伊国屋文左衛門

著 者／羽生道英

発行者／水谷晃三

発行所／株式会社 青樹社

〒101 東京都千代田区三崎町2-6-7

T E L (03) 3264-6902 (代)

F A X (03) 3262-9262

振替 00110-7-47648

電子組版／有限会社高島印刷所

印刷所／誠宏印刷株式会社

製本所／株式会社石毛製本所

定価・発行年月日はカバーに表示してあります

ISBN4-7913-0817-4

紀伊国屋文左衛門

目次

賄賂の舞台	7
にわか成金	20
悪魔の火	33
生類憐れみの令	50
男冥加	59
商道開眼	74
商魂の海	85
表裏	95
陰の將軍	112
寵愛	128
拝領した女	144
根本中堂落札	150

野望の炎

164

几帳きちょう

174

男心と女心

184

冷風

197

金殖魔

206

絆きずな

218

切餅一つきりもち

233

討ち入り哀歌

244

善と悪

259

失脚

270

零落の門

283

あとがき

299

装幀／辰巳四郎

紀伊国屋文左衛門

賄賂の舞台

一

ときは、元禄九年（一六九六）の春のことだった。ところは、江戸吉原の中通り。

江戸町二丁目の大松屋の離れ座敷に、二十七、八歳くらいの、町人の風体をした男が座っていた。

先ほどから、植木を自然に配した庭を眺めているが、どうやら、人待ち顔である。

雅致のある面貌めんぼうをしており、太めの眉が、二重の双眸そうめくが、なだらかな鼻梁びりょうが、品のよい唇が、互いに端正を競い合っている。

だが、顎のあたりの骨組みには、みやび男に見

られない野性の荒々しさがあった。

男が、待ちくたびれて立ちあがろうとしたとき、横手の襖ふすまがするりと開き、一人の武士が姿を現し、いきなり、

「そのほうが、紀伊国屋文左衛門か」

遠慮のない口調でいった。

四十歳前後であろう。落ち着きもあって、威厳もある。

「はい、私が文左衛門でございます」

男が、こたえた。

この男が、巷ちまたで評判になっている、紀文きぶんこと、紀伊国屋文左衛門だった。

やり手の材木商で名を売っている男である。

「余が、幕府勘定頭かんじょうがしらの荻原近江守重秀おぎわらおうのかみしげひでじゃ。見知りおけ」

平伏した文左衛門の頭の上で、武士が名のつ

ちなみに、勘定頭とは、勘定奉行のことである。とても、武士の表芸に秀でているように思え

ないが、頭の回転はよさそうだ。

(案外、つき合いやすいかもしれぬ)

文左衛門は、肩の力を抜いた。

「おぬしのことは、以前にも、杉山総検校けんぎょうから名を聞いて知っておった」

「はい、お覚えいただき、ありがとうございます」

「また今年に入ってから、河村瑞賢かわむらみずけんからも、ぜひ、おぬしに会ってくれとたのまれたゆえ、会いにまいった」

そういうながら、座敷の片隅に置いてある菓子折の包みを、目ざとく見つけた。

視線がねばっこく、中味の値踏みねぶみをしているようだった。

(やはり、そちらのほうが気になるのか)

そう思いながら、文左衛門は、

「ああ、これはつまらぬ粗菓そかでございますが、お口に合いますかどうか」

菓子折を引き寄せて、近江守にさしだした。

「あまり、気をつかうでないぞ」

そういうながらも、近江守は、指先で包みの感触を楽しんでいるようだ。

(五百両か)

近江守が満足そうに目を細めた。

「ところでこれは、おぬしの挨拶のしるしと思っ
ていいわけだな」

「もちろんでございますとも」

文左衛門が、こたえた。
「ならばよい。だが、公儀御用達こうぎごようだちの鑑札を、これ
くらいの菓子折でなんとかしようと思っ
ているのなら、大いに見当ちがいだぞ」

近江守が、庄するようにいった。

(こりゃ、評判以上に、汚ないご仁だな)

文左衛門は、賄賂好きの役人の実態が見えてき
たような気がした。

紹介者の河村瑞賢が、文左衛門に助言してい
た。

「顔つなぎだけなら、五百両の手土産で上等だ。
なにしろ相手は、貰い上手の近江守のことだ。多

少の駆け引きはするだろうが、あっさり手を引かず、商売のためだ、少々、嫌なことをいわれても、腹を立てぬことじゃ」

近江守は予想どおりの言動だった。

「もし、私を公儀御用達にしていただけののなら、御前さま、万両の献金も惜しみはいたしませぬ」

文左衛門が、大きく切り返した。

「一万両とは、大きく出たものよ」

「天下の勘定奉行さまに、一万両くらいの金は、端た金で失礼でしょうが、もし、この場で鑑札がいただけるとあれば、いまからでも金を運ばせ、御前さまのお目の前に積んでごらんに入れますよう」

はったりでないことは、文左衛門の態度で察せられる。

「ほう、さようか」

さすがの近江守も、たじろいだ。

そのころ、鑑札料は二千両が通り相場だった。その五倍を、文左衛門は出そうというのである。

銀六十匁（金一両）で、米一石（約一五〇キロ）ほど、買える時代の話である。

文左衛門の申し出は、あまりにも桁ちがいであった。

（河村瑞賢の話では、去年の江戸大火で、文左衛門は、五、六十万両ほど稼いでいるだろうといったが、どうも、まことらしいぞ）

と近江守が、固く信じると、

「たとえば、おぬしに鑑札を下すにしても、いま、ここでというわけにはまいらぬ。それがしとて、相談したいお方もおいでゆえ」

まずは、即決を避けた。

だが、許可する含みは、残している。

「それは、承知しておりまする」

文左衛門がいった。

これも河村瑞賢の話だが、

「近江守には、何でも彼でも相談する人がある。それは側用人の柳沢出羽守保明（元禄十四年十一月、美濃守吉保と改める）だ」

という。

五代將軍綱吉の寵愛を一身に受け、いまでは、幕閣随一の実力者である。

近江守が、出羽守に相談するのは、役人としての保身術でもあったが、いま一つ、金になる商人が現れたことを、報告するためでもあった。

文左衛門は、それも十分承知している。

（老中であろうと、側用人であろうと、要路に近づくためなら、献金でも、賄賂でも、けっして惜しみはしない。だが、その分だけ儲けさせてもらいますよ）

文左衛門は、はじめから、そう肚をくくっている。

文左衛門は、商売のためならどんなことでもする。たとえ、命をかけることもいとわない男である。

「御前さま、このお話は後にして、今宵は、ほんにささやかではありますが、この紀伊国屋、心ばかりの宴席を用意させていただきました。お楽し

みいただけると存じますが」

肚の内など、まるつきり見えない柔和な表情で、文左衛門がいった。

文左衛門は、話相手に、けっして本心を見抜かれない自信を持っていた。

じっさい、いま彼の本性を、知る人はまったくいないのである。

二

「あまり、かまうでないぞ」

近江守は、いちおう遠慮はするが、腰は据えている。

供応は当然、といった感じを受ける。

「ま、御前さま、一度、この紀伊国屋の趣向も、味わっていただきとうございます」

文左衛門が、にんまりした。

自信に満ちた顔だ。

近江守は、供応には慣れている。

商人たちは、手を替え品を替えて、幕府の大金庫を預かっている近江守に近づいてくる。

賄賂攻めはするし、女も抱かせる。なかには、御禁制の品まで持ってくる商人もいた。

(紀伊国屋、わしは少々のことでは驚かぬぞ)

案内する文左衛門の背中に、近江守は思いを投げつけた。

近江守は、今年、三十九歳になる。

四代將軍家綱の治世においては、勘定所の普請役下役であった。いわゆる下級役人である。

ところが、延宝八年(一六八〇)に、綱吉が五代將軍になったとたん、幸運の道が開けてきた。

荻原重秀の才幹が認められ、吟味方改役に取り立てられ、さらに、勘定吟味役にのぼってゆく。

やがて、側用人の柳沢出羽守の殊遇を得るようになり、今年の正月、勘定所頭(奉行)になった。

彼の才幹は、ただ事務能力に長けているというだけではなかった。時代の趨勢を読む才覚は、抜群である。

去年の八月、近江守の建議で金銀の改鋳を行い、幕府財政を立て直した。その功績が、彼を勘定奉行の地位に近づけたことだけは、たしかである。

この異例の出世を、人が評する。

「運が、よかっただけのこと」

「上司の金玉を握るのがうまい。上司が落ち目になりそうになったらすぐ離し、のぼってくる上司の金玉を、すばやく握る」

「人を踏台にしても、なんとも思わない」

こんな陰口が、役所のあちこちで、ささやかれていた。

しかし、羨望の目も多い。

誰しも、出世はしたいのである。

それだけに、かつての親友も、上司も、針のよな嫉妬の視線で、近江守の背中を刺している。

そして、友と名のつく者は、一人もない。

その寂寞とした孤独感を背負いながら、近江守は、彼なりの使命感に燃えていた。

（いまの幕府は、おれの才覚が必要なのだ）

（將軍家も、その一統も、また大奥も、まったく金の苦勞も知らずに、奢侈の生活に、慣れきっている）

（これらの人々に遭わせる金を、わし一人がひねりださなければならぬ。そのためならば、たとえ世間から、金殖魔とさげすまれようと、金をつくりださねばならぬ）

そんな回想をしているうちに、宴席の大広間に着いた。

「さあ御前さま、たったいまから、この吉原は、御前さまお一人のものになりました」

「なんと」

「今宵一夜は、どの揚屋にも、客が一人もいないという意味でございます」

「遊里の一夜を、そのほうが買い取ったと申すのか」

「はい、そのとおりでございます」

「それほどまでにせずとも……」

よいのでは、と近江守は思ったが、不思議に、優越感が湧いてくる。

近江守が床の間を背にして座ると、やがて、きらびやかな緞子をはおり、はでやかな玳瑁の櫛で髪飾りをした太夫が部屋に入ってきて、近江守に寄りそうようにして座る。

「菖蒲太夫でありんす」

名のると、とろけるような艶を投げかけた。嬋娟の美女である。

（吉原にはいくども来ているが、こんなに美しく、あでやかな女に出会ったことがない）

うめくようにして、近江守が感嘆した。

二千人を越すといわれる吉原遊女の中で、この時代、格子、散茶、埋茶など階級で呼ばれる遊女たちがいたが、太夫と呼ばれるのは五指にも満たない女たちである。

遊びなれている近江守をもてなすには、並みの女では落ちないことを紀文は見抜いていた。

それだけではない。次々と選りすぐりの女たち

が彩りを添える。ざっと二十人はいようか……。

「御前さま、窈窕たる美人ばかりを集めたつもりですが、お気に召しましたか」

なかば茫然としてゐる近江守に、盃をすすめながら、文左衛門がいった。

「うむ。壮観としかいいようがない」

近江守が、舌を巻いた。

「自慢するわけではありませんが、この吉原には、およそ二千の遊女がおります。私は、その中から二百人を選びだし、さらに二十人にしぼった女たちが、ここにゐる花魁たちでございます。天下の勘定奉行さまに、ご満足していただきますには、これくらいのことはいたしませんと……」

文左衛門が、少し胸を反らした。

「なかなか、味なことをするのう」

これまで、こんな供応を受けたことがなかった。近江守は、いくどもため息を吐いた。

近江守は三千石取りの旗本である。

もし、吉原の一夜を買い占めたうえで、これだけの花魁たちを揚げて遊ぼうものなら、近江守は、まず一年間、飲まず食わずでいなければならぬ。

元禄元年刊行の『諸国色里案内』によれば、吉原の揚代（招き代）は、つぎのとおりである。

遊女は、揚女郎と見世女郎に区別されていた。揚女郎は、客が揚屋に招き、見世女郎は親方の店で客をとる。

揚代は、昼夜ともに同額である。太夫が銀三十五匁、天神が二十五匁、鹿恋が二十五匁、散茶が二十五匁と二十匁のふた通りあり、埋茶は散茶と同じ。端女郎には、五匁取、四匁取、三匁取、百文取の四種があった。

ちなみに、当時の大工の日当が、銀二匁五分である。

そして吉原の一夜を買い占めようものなら、少なくとも、千両はかかった。

（こんな豪勢な宴会は、はじめてだ。これでは、

大尽遊びをしている奈良屋も、顔負けだな」

近江守は、ふと、江戸で河村瑞賢と一、二を競い合っている材木商の、奈良屋茂左衛門の脂ぎった精悍な顔を思いうかべた。

こののち、文左衛門の商敵となる人物である。奈良屋も、近江守に取り入っている一人である。

（あの奈良屋も、ずいぶん遊ばせてくれたが、吉原を買い占めてまで供応してくれたことはない。もしかすると、この紀伊国屋文左衛門という男は、底知れずの大物かもしれないな）

近江守は、あらためて文左衛門の顔を見た。

文左衛門は、近江守の強い視線を、やんわりと、愛想笑いではずし、何事か菖蒲太夫にささやいた。

菖蒲太夫が、髪飾りを揺らして、うなずいた。

「御前さま、今宵はどうか、ごゆっくりとお過ごしくださいませ。明朝まで、この菖蒲太夫が、お相手をさせてもらいます」

文左衛門がいった。

「よいのか」

近江守が、たずねた。

その質問は、「床入りできるのか」という意味が含まれている。

「口幅ったいことをいうようですが、御前さま、この吉原で、私にできないことは、何一つありません」

文左衛門が、微笑んだ。

太夫の位にある遊女は、相手がどんなに身分が高かろうと、また長者であっても、初会の客とは、めったに床入りしないならわしになっていた。

盃事を三會ほどくり返し、そのときの雑用や揚代などに十兩ばかり遣ったあとでないと、床入りできないのが、吉原の仕来である。

そのならわしを、文左衛門は、破ることができるのだ。

「町人とはいえ、おぬしは、凄い男よのう」
近江守がいった。